| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 小野　修平 |
| 学位の種類 | 博士（芸術学） |
| 学位記番号 | 博甲第　7830　号 |
| 学位授与年月 | 平成　28 年　3 月　25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | ヨルク・シュマイサーの＜変化シリーズ＞研究<br>－多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性と表現の発展性について－ |
| 主　　査 | 筑波大学教授　博士（芸術学）　仏山　輝美 |
| 副　　査 | 筑波大学教授　博士（芸術学）　石﨑　和宏 |
| 副　　査 | 筑波大学准教授　博士（芸術学）　田島　直樹 |
| 副　　査 | 筑波大学名誉教授　白木　俊之 |

# 論文の内容の要旨

（目的）

本論は、版画家ヨルク・シュマイサー（Jörg Schmeisser 1942 - 2012）の作品群〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉（各 7 点で構成される計 21 点の作品。著者はこれらの総称を〈変化シリーズ〉としている）に見る表現内容・方法を明らかにし、多版多色刷り銅版画の特性を踏まえた版画表現の可能性を提示することを目的としている。

（対象と方法）

研究目的を達成するために、実見調査ならびに文献・図版をもとに、まず〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉についてそれぞれを構成する版の種類と数、刷り順、技法を分析しまとめている。特に刷り順について、各版の相関を詳細に示す一覧表を作成し考察の資料としている。さらに、多版多色刷り銅版画を制作する著者自らの経験をもとに、技法・素材の分析に必要な技術的観点を整理した上で、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉に見る表現内容・方法の特徴とは何かについて考察し、その成果によって多版多色刷り銅版画の特性を明らかにし同技法による版画表現の可能性を模索している。

第 1 章では、多版多色刷り銅版画の技法上のメカニズムとその特性をまとめた上で、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉に見る表現方法の独自性について、画材、色彩、技法、刷り、版の使い方といった観点で分析し考察している。

第 2 章、第 3 章、第 4 章では、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉のそれぞれについて、版とイメージの変遷を分析している。

第 2 章においては、〈変化Ⅰ〉の作品 7 点が計 9 種の版によって制作されていること、主に制作時期が前後する各作品間で版の再利用が実践され、その際に加筆や変更が行われている場合もあることについて、検証している。〈変化Ⅰ〉の各作品は 9 種の版の連鎖によって分かちがたく関係づけられていることを指摘し、「7 作品が一つとなって強い“変化”のメッセージを投げかけてくる」とまとめている。

第 3 章においては、〈変化Ⅱ〉の作品 7 点が計 15 種の版によって制作され、そのうち 5 種の版が〈変化Ⅰ〉で使用されたものであることを指摘している。〈変化Ⅱ〉に見る“変化”は、〈変化Ⅰ〉の版を取り入れ吸収しながらさらに新たなモチーフを加味する方法によるものであり、それは単なる版の加筆ではなく、〈変化Ⅰ〉を成立させた版の消去であるとしている。

第 4 章においては、〈変化Ⅲ〉の作品 7 点は、お互いに同一の版を共有することなく、それぞれ固有の版によって成立していることを指摘している。モチーフの使用については〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉で一貫した連続性が認められるが、〈変化Ⅲ〉の表現方法とその位置づけは〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉とは異なるものであり、連続した 7 作品で見せる「連続的変化」から解放され、7 点の作品は個々に自立した力強い表現を獲得していると述べている。

第 5 章においては、他の多版多色刷り銅版画家や画廊経営者など複数の関係者へのインタビューを通して、彼らがシュマイサーとその作品をどのように評価しているのかを探り、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉に見る表現内容・方法の特徴と独自性について考察している。

（結果）

〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉の表現方法の特徴について、連鎖によって成り立つ一連の作品群には、イメージの変容の有様と作者の思考および感性の変化が表れており、そのことに版画表現の独自性と可能性を見いだすことができるとした上で、そうした変容と変化の表出は多版多色刷りという技法によってより顕著に示し得るとしている。

また、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉においては、変容と変化を具現化し作品とする「発展的」方法（〈変化Ⅰ〉）から始まり、やがてスタンダードな版画技法に帰着していく（〈変化Ⅲ〉）シュマイサーの取り組みから、「一つのイメージの痕跡は、版や色との関わり方次第で如何様にも変化するという表現展開の在り方」とその具体的な手法を見出すことができるとしている。

（考察）

本論においては、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉の計 21 作品について、作品の実見調査や文献・図版を手掛かりにそれぞれの作品に使用された版の種類と数、刷り順、技法などを推察し、作品の成り立ちのメカニズムを詳細にまとめた資料が考察の基盤となっている。その分析結果は、あくまで著者による推察であることに留意しなければならないが、入念な観察と洞察力によって、シュマイサー独自の制作工程の一端を具体的に提案することに成功している。また、著者は今後の課題の一つに実際の版についての調査と分析に取り組むことを挙げているが、複数の作品への転用の過程で原形をとどめることなく変形していった版からわかることもまた結局のところ推察である。もはや目にすることのできない作品制作の工程は、眼前の作品から思い描くほかなく、その分析と考察に際してはますます著者の実制作にもとづく豊かな経験と高度の知識が問われることになるであろうことは言うまでもない。

一方、〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉を貫いている表現意図は〈変化Ⅲ〉において大きく転じていると見ることもできるが、本論では、これら 3 つの作品群を連続する取り組みとして考察し、同一のモチーフを活用しながらも多版多色刷りという版画技法の独自性によって表現内容・方法を展開していくシュマイサーの卓越した技量を強調している。3 つの作品群を関連づけて到達したシュマイサー作品のそうした魅力と意義は、著者の入念な分析と考察によって得られた知見として評価できるが、作品制作に臨む作家はむしろその都度の版との対話から感覚的に次の一手を絞り出し作品を生み出しているであろうことを思うとき、今後の研究に際しては〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉を一義的な解釈でくくり結論を急ぐことのないよう、より大局的な視座からの分析も期待したい。

# 審査の結果の要旨

（批評）

シュマイサーが制作した〈変化Ⅰ〉〈変化Ⅱ〉〈変化Ⅲ〉について、各作品の版の種類と数、刷り順、技法を詳細かつ具体的に提案し、その成果をもとにシュマイサー作品の意義と独自性を論証したことは新たな知見として高く評価できる。また、版の種類と数、技法、表現内容を分析しまとめたデータベースや、刷り順について各版の相関を詳細に示した一覧表は、今後のシュマイサー研究の礎となり得る有用性の高い資料であり、本論の大きな成果である。さらに、シュマイサーの一連の取り組みから、作品制作の過程におけるイメージの変容の有様と作者の思考や感性の変化をも表し得る版画表現特有の在り方を見出し、この点に着目して多版多色刷り銅版画の表現技法としての可能性を提案している点は独創的で、汎用性の高い知見として評価できる。

平成２８年１月１５日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。